



東九州支部報



山 (バグルンパニカワ)

Watanabe Kiriji

マナスル三山(渡辺欣次氏・新潟市 提供)

日本山岳会のマナスル登頂五十周年記念式典(日本山岳会、ネパール山岳協会)と、トレッキングの参加者は、日本各地から発って平成十八年十二月九日にバンコクに集合。九十六がそろってカトマンズへ。

三日目(十一日)は祝賀会と記念式典。音楽隊を先頭に雨の中のパレード。午後、ハイアット・リジエンシー(カトマンズ)で開かれたヒマラヤ観光会議と記念式典。各国来賓の挨拶。一九五六年の登頂の時、頂上に立ったうちの一人である、日下田實氏は「五十年後にこのような歓迎を受けるとは思いませんでした」と英語で話した。日本山岳会長・平山善吉氏は「我が会にマナスル登頂の機会を与えてくれたネパール政府に感謝します」とあいさつした。

トレッキング・コースは、四十周年の時、サマゴンパより見上げたマナスルの姿が忘れられずに、三山の見えるバグルンパニへのグループ(二十六名)に参加した。バスでポカラ方面へ生き、マルジャンディ河よりベンサルへ。ここで一泊。

次の日、リーダーより八〇〇メートルを四時間といわれ、一番先を歩くのだとストック両手に進む。晴天で家の並ぶ小道を、階段状の石段と畑の中を三〇分ほど登ると、下に昨夜泊まった町並みが見える。

リーダーはエベレストにも登った福岡県出身の若者であったが、それが何と、豊泉荘(別府市)での、ある山の会の若者の結婚式で、隣の席に座っていた方なのだ。今回が二度目の出会

懐かしのマナスル三山 登頂五十周年記念式典に参加して

西 孝子

《 も く じ 》

懐かしのマナスル三山	1
竜峰山・竜が峰	2
谷ガ迫山	3
馬糞ガ岳など	4
猪群山	5
北アルプスの報告	6
今西錦司⑧	8
今秋の登山	8
クラブ紹介②「大分山の会」	9
私の無名山ガイドブック 27	10
お知らせ	11
後記	11



いで、なんとも不思議な縁である。広い車道に出て、後ろを見れば誰も来ない。リーダーの許しを得て、一人出先に行く。車道を一キロで登山道に入る時、現地の人五人が、そこを登れと教えてくれる。木立の中に入ると涼しい。ネパールの一二月は、昼で晴天なら一〇〇メートル前後でも夏だ。息苦しさを我慢して石段を登る。突然車道に出る。前に丘が見えてきて、サツカーコートを過ぎたところが目的地のパグルンパニ。四時間で到着。自分のタイムを褒め、足を撫でてやる。テントと食糧とポーターは車でやってきた。なんと、横に部落と学校があり、近くの部落より三〇〇人集まると聞く。

食堂一、トイレ三、二人用のテ

(テント村)



ントが一三張り。丘の広場にテントの花が咲く。北にマチャプチャ

レ「魚の尾」がそびえ、その右に十一月に登頂したマルディーヒマールが見える。

アンアプルナ山系、皆がそれぞれが山名を言い、サーダー(現地案内人)・ダヌーの言うのを信じない連中だ。東北にマナスル三山だ。スケッチクラブのメンバーはスケッチブックと向かい合う。自家製の紙に線描き、筆と墨、色づけはクレヨン、水彩と、夕暮れちかくまで・・・写真組はちよるちよると走り回り、三脚とたわむれている。カメラもみな上等である。私はテントの中で菓子をむしやつき、日記つけに居眠り・・・時々テントから首を出してはお喋り。作品は下書きだけで、あとで版画にすると言っていた方が、お願いでいなかつたのに年賀状と一緒に送って下さった。また一つ宝が増えたのだ。

翌日は、一六二五メートルの、丘から見える部落へトレッキング。途中足を止めてスケッチしたりする。ビスタリーで車道造り工事のそばを通る。岩があればハンマーで小さく割り、小石を土手に使う。ここは人力のみで道造りである。

遠くに見えていた部落に近づくと、若い女の子が立っていた。何と、花嫁で新郎の迎えを待っているのだ。車道がやがて、どの部落にも通じるだろう。

カトマンズからポカラのフィシユテールロッジへ、そしてカカニの丘へ、六〇、七〇、八〇台の老年の集団の旅であった。

思えば、私が二四歳の時、山登りの面白さにどっぷりとつかっていたころである。世界第八位、八一六三mのマナスル初登頂のニュースが流れた。それは敗戦に打ちめされた日本に、希望の光が輝くような出来事であった。そんな半世紀前の記憶をたどりながらのマナスルへの旅であった。



付記 版画は、渡辺欣次さん(新潟市)が、カトマンズやパグルンパニでスケッチしたものを完成させて、送って下さったものです。ご本人のご了解を頂いて皆さんにお見せしました。

竜峰山・竜力峰 辰(たつ)にちなんだ山旅

(十月月例山行報告)

中野 稔

十二支の子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥はそれぞれ一月から十二月までを表しているのだが、時計版と比較すると春夏秋冬が連想されて実に興味がわいてくる。十干十二支の組み合わせで六十の組み合わせが出来る。

十干の五行は木、火、土、金、水であり、木星、火星、土星、金星、水星が連想される。これに兄(え)(陽)、弟(と)(陰)を2当てているわけだ。還暦とはまさにこれにこれをさすのだが、某テレビ番組で説明されて改めて気が付いた。何気なく使っている言葉も身近になるとその言葉の意味の大切さを実感できる。丁度病気になる健康のありがたみが実感できるように。そして、毎週山に行ける境遇に改めて感謝している今日この頃である。

一〇月二十八日(日)午前四時、夜明け前の大分を発つて、車は西へ向かって車走る。予定していた参加者が減り、車の中は二人だけ。それでも支部の月例山行は実施される。豊後竹田から阿蘇盆地を通り早晩の八代平野を目指した。

当初の予定は一泊二日だったが所用のため日帰りとなった。

熊本[2]から乗り八代[3]で降りたが、[3]は竜峰山登山道入口まで数分の所である。しかしその入り口がわかりづらく、早朝の国道では訪ねる人もままならず、あちこち探し、何とか中腹の駐車場のある登山口まで狭い道を辿り着いた。朝食を済ませて登頂準備をしていたら明るくなって来たので、ヘッドライトは灯す事なく立派な登山道に第一歩を踏み出した。

すべてに第一歩があるように、初めての山には緊張と不安がよぎり、大地から沸き起こるパワーを全身で浴び、その記憶は平凡な日々の暮らしの中で爽やかな思い出と共に時折り蘇ってくる。

駐車場の標高二七〇メートルの登山口を六時四十五分に出で、五一七メートルの竜峰山山頂に七時十五分に到着。頂上は公園になっていて、コンクリートの立派な展望台は、ほぼ三六〇度の展望が得られ御来光登山で正月は賑うそうである。

ここから次に登る予定だった八峰山(五七四メートル)と八丁山(三七六メートル)が南の方角に見えていた。海の方角の宇土半島や天草島、熊本平野は霞のため、ほとんど判別できないが、山の方角は、大行司山や雁俣山、京丈山から、さらに遠く連なる脊梁の稜線がはつきり見えていた。

竜ヶ峰へは、途中、石灰岩の露出した、ハードな道があるのもの

(竜峰山山頂)



の、あとはほとんど歩き易い尾根道で八時半に到着。西と北の展望が開けているが、やはり霞にもやっていた。

往路を竜峰山まで引き返し、同じ道を下山して、十時十分過ぎに駐車場に到着。次に八峰山を目指すものの、道路工事のため十二時迄通行止めとの事、急遽予定変更して一等三角点のある笠山(五六七メートル)に登ることにし、進路変更。

田浦町と芦北町の境界にあり山頂付近の「雨おらび岩」からの展望が良いとの事で、期待は裏切られる事はなかった。

下調べもなく、急遽めざした目的の地は、何度にも人に道を尋ねて行くが、山登りなどに関心のない里人に、さほど有名でない山の道(熊本百名山には入っているが)

を尋ねるのは骨が折れる。

車は林道を、馬頭観音がある所まで行けたので大助かりである。十二時過ぎに駐車場を出て、ほぼ三六〇度の展望がある「雨おらび岩」で、のどかな秋の日を浴びながら昼食。展望がない木立の中の山頂に十二時五十分到着。一等三角点の大きなコンクリート製の六角柱が迎えてくれ、元越山や長崎の八郎岳を回想させられた。

一時二十分前には登山口の馬頭観音駐車場に着き、日奈久[4]から熊本[5]迄高速で、後は国道五十七号を豊後街道と呼べるかも知れないと思いつながら、ベースキャンプのある大分市へ向かった。

甥っ子からの年賀に「山は楽しいですね」とあったので、返事に「苦は楽の中にしかなく、楽は苦の中にしかない」と返事を書いた。

参加者：飯田、中野

谷が迫山(蛇谷山)

巳(み)にちなんだ山旅

(十一月月例山行報告)

飯田勝之

十一月十九日(日)、夜半からの雨はやむ気配もなく続いていく。独りで行く山なら多分、こん

な晩秋の天気であれば床から起きあがることすらない。しかし、全天候型登山を自認する東九州支部だ、大分からの組は予定通りに発っているに違いない。待ち合わせの別府国際観光港に六時十五分過ぎに待つと、ほぼ定刻に車二台がやってきた。一路今日の目的の国東半島へ。

今月の十二支の山は巳(み)にちなんでの蛇谷山(通称「谷が迫山」・国東市武蔵町)。旧武蔵町役場前から県道をどんどん半島の奥へと入って行って、武蔵川の源流をさかのぼっていくと、やがて道が細くなり、さらに林道となる。しばらく上ると突然大きな立派な二車線道路が出現した。行入ダムに通じる道だ。少し行くと掘り割りの峠に着いた。旧国東町・武蔵町境の蛇峠で、ここが目指す山の登山口。

小さなこぬか雨が間断なく続いていく。九時十五分、雨具をつけて出発だ。掘り割りののり面を回り込んで稜線に取り付く。荒れた二次林を登ると鹿避けのネットが現れ、その向こうはスギの植林地。ネット沿いに約十数分登るとピークについた。「ここが山頂か?」「いや、三角点も何もない」「山頂は三等三角点のはずだ」さらに直進すると、どんどん下っていく。「ちよつと待て。これは違う。地図にはこんな下りはない」「地形的に見て左だ」先発隊がブッシュを分けてピークから北に続く稜線を踏み込む。「こつちのようだ」その



(谷が迫山にて)

証拠の記念写真、いつもの今西流の「バンザイ」と「もう二度とこないよヤッホー」で、早々に山頂をあとにする。十時十五分、蛇峠へ下山、登り五〇分、下りは二〇分の山登りだ。

時刻もまだ朝のうちだ。「どこか近くに温泉がないかなあ」「梅園の里にあるよ」「そこに入る」「でもまだ早いよ」などと意

見が飛び交う。地図を見てるとすぐ近くに三角点のあるピークがある。・。・。全員はもう完全に戦意喪失。「風呂に入ろう」で衆議一決する。

峠から少し引き返して、細いコングリート舗装の、急な林道を登るとほどなく小さな峠に着いた。目指すピークはさほど遠くはなさそう。雨の中、再び峠から稜線に踏み込む。赤いテープが点々とある。「こんなところに登る物好きが他にもいるんだ」数分でピークに着いた、が、何もない。雨に煙って向こうにもう一つピークが見える。

直角に南に向かって下ると、すぐに明るい萱野の鞍部で、さらに二・三分の登りでついた頂上にはぼつんと四等三角点があった。十数分の登りで今日二つ目の山頂だ。「何という名の山か知らないけど、バンザイ」と「ヤッホー」とやっつて、そそくさと下山。峠に下りついてもまだ十一時になったばかりだ。「もう一つ簡単な山をやつて、そのあと温泉に入ろう」「次は何処だ」地図を開いて梅園の里近くの稜線にある三角点を目指すことになる。

車はいったん長い稜線の上まで出たが、そこからだと目的地は遠く、雨の中をこぎ分けて行けるようなヤブではない。引き返し、より取り付きやすいところを探すうちに、稜線上にある「梅園の里」温泉の広場に着く。GPSと地図を見るとそこからもまだ相

当なヤブこぎだ。前には温泉会館・。・。全員はもう完全に戦意喪失。「風呂に入ろう」で衆議一決

参加者：安部、飯田、石川、岐部、佐藤(秀)、得丸、中野、西

馬糞ヶ岳など 午(うま)にちなんだ山旅

(一二月月例山行報告)

安部可人

一二月三日
一人乗りのハーフは四時四四分に発車。小倉東ICで中野車(西飯田)と合流。鹿野ICで高速を出る。

馬糞ヶ岳(九八五、二三)へ
(馬糞の形、一等三角点)へ
過疎の秘密尾の集落(平家の末裔?)の奥にある氷見神社(この神社は、中宮、奥宮は今も女人禁制。受け継ぐ住民はただものじやない)を過ぎて二キロメートル、水無橋に駐車。
標高五五〇m地点。九時一〇分に出発。植林の中を右へトラバースして、約二〇分で礼ヶ峠に着く。

珍しい昔の道しるべの石柱があった。ここから尾根歩き。ずっと直登がつづく。八五〇mから右へ、いったんゆるやかになり、そしてササこぎの急坂、登りついたところは長野岳への分岐。さらに右へ三〇〇メートルで眺望雄大な山頂到着、一〇時四五分。

(馬糞ヶ岳にて)



一二時前に下山し、野営の時刻にはまだ早いのもうひと山。そこで急遽選んだのが近くににある飯ヶ岳(九三七、三m)だ。地図では国道三一五線の峠から道が有る。標高五八五mの峠の標識から七〇メートルほど北に登山口の標識を発見。荒れた林道があり、中年の夫婦が下山してきた。聴くと一時間ほどの登りらしい。
飯ヶ岳へ(九三七、三)
一三時二五分出発。皆は車の中

で昼食はすませたという。私はスパゲティを食いつつ歩く。林道は一〇分ほどで終わり、スギの植林の中、山腹の巻き道から急登に変わり、一五分ほどで急な尾根に乗る。

二次林の急な登りが一五分。ようやく平坦な道になって五分ほど楽をする。イワカガミが道の両側に目立つようになり、急な道は続き、今日最高の二〇〇mの高度差の直登はきつかった。

一四時三五分、三等三角点の飯ヶ岳山頂到着。素晴らしい眺望で



(飯ヶ岳のバンザイ)
ある。一五分だけ休んで、急ぎ下山。登山口の峠に一五時四〇分着。この後今宵の幕営地探しに。明日の目的の助ヶ岳への入り口近くに戸根という集落の国道脇の一段高いところに、明治の分教場跡。そ

の奥の大潮神社の広場に駐車。目立たぬように静かに幕営開始。安部持参のイノシシ汁(うどん)が好評。当人は胃かいよう再発で、飲まず、吸わず、残念。七時半には全員就寝。

一二月二四日

助ヶ岳へ(一〇〇四、二三)
山麓の石鎚神社の一〇段の石段の中央に鎖が落とされ、この山の山頂直下のすこさを教えている。

林道終点の登山口を、まだ暗い午前六時四〇分に、私は皆より一足先に出発。植林の中の急な登りから、二次林のジグザグ登りになる頃、後方の空が明るくなり、一人先きを行く私はすがすがしい気持ち。

両側に優しい姿の尾根を眺めながらの、小さな尾根の登りは、しばらくはゆるやかに。左に尾根の新道が合流し、その少し上に八合目の分岐点。ここで後続の三人と合流。右は鎖コース、左は安全コース。

どちらを選ぶか注目していたら三人は右へ、年を考えて、私は左へ。鎖コース組は一部を迂回してきたらしい。分岐から八分登山頂。三等三角点と大きな石の社があり、快晴の空の下、素晴らしい眺めだ。しばし休憩の後、ここで弟見山へピストン(往復三時間コース)する組と、ゆっくり下山する組とに分かれ、飯田、中野二人は出発した。しかし、すぐに引き返してきた。「ガンコなお年寄り二人を

残すとケンカになるから・・・」
(正解)



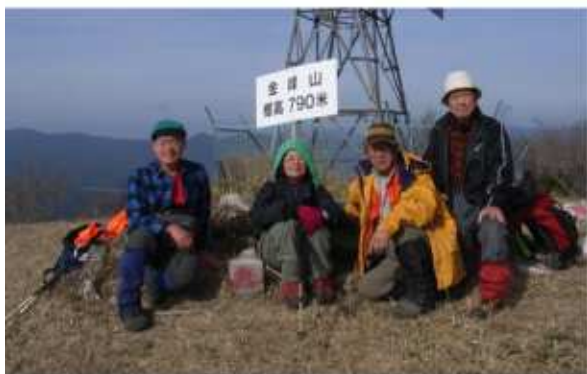
(駒ヶ岳山頂にて)

この後四人で一緒にもうひと山、金峰山に登ることになった。下山は分岐から新道を通ることにした。「駒ヶ岳展望コース」と名付けられているとおり、振り返れば山頂が眺められる尾根道は、切り開かれたばかりの真新しい道で、地元の人たちが大切にしている山とみた。下山九時四五分。数人の登山者がこれから登るところだった。

金峰山(七八九、九三)へ

(今回一番楽な山)

馬糞ガ岳で会った夫婦が推薦してくれた山だが、かなり耳の遠い安部さんが『珍峰山ですね』と本気で問い返して恥ずかしい思いをした山だ。(信仰の山、ぼちがあるぞ)



(金峰山山頂にて)

大間から六〇〇メートル林道を行くとすぐに終点。ここが登山口だ。一〇時三〇分出発。三〇分あまりで「思いでの丘」と名付けられた平坦地に着く。下の方から不快なバイクの爆音が迫ってくる。山道をバイクで上ってきたのだ。今にもここまで来そうな様子。かつての組合の闘志、飯田さんは『絶対通らせんぞ』と怒りをあらわ。結局未熟な連中は、少し下の急傾斜の斜面を登れずに引き返していった様子。ケンカにならずにすんだ。

つづら折りのわずかな急坂でも疲れて遅れ気味。一ノ岳の鉄塔もきからわずかに下って、最後の急な登りをあえぎ登ると二〇分登山頂だ。十一時三十五分、大きく広

追記

山口ICから市内へ。すぐに大内家の文化遺産、五重塔を見学し感動。次は木戸神社から入り、林道終点へ。三時二十分、曲輪を登ること二十分で高嶺岩址へ。鴻ノ峰(三三八m)の山頂。悪党・毛利元就(にだまされていた?)、その盟友、当主大内義隆が重臣、陶晴賢の反逆に対して、急ぎよ改修の山城、間にあわず敗走。宗麟の弟義長(大内義長)をたてて、大内家を再興したした晴賢も、後に敵島で元就に大敗して滅ぶが、毛利から周防国を守るには、甘い主君にはついていけなかった晴賢が、逆臣どころか賢臣と私は思えた。高嶺城は大内義長(義隆)が毛利(陶晴賢)の侵攻に備えて・・・、と頂上の説明板で読んだ。()内は「山口県の山」(中島篤氏)の説明であるが、これもありえたとと思う。

その夜は湯田温泉の宿に泊まり、翌日二六日(月)は東鳳凰山(七

々と丸い頂には中電の鉄塔があり、三六〇度の大展望だ。スキヤキを食う善良な二人の中年男性。えらく気のいい話し好きで、食うのをやめ、地図を広げて説明してくれる。我々もここで食事を取り、しばし楽しい交歓。十二時に人の良い二人組に別れを告げて下山。十二に四十五分には登山口の駐車場に着き、ここで三人と分かれた。

萩往還の峠には五一一mとあり、そこに森林展示館がある。左の石段を上ったらやつと板堂峠を発見登山開始。すぐ中止。二万五千分の一がない不安、疲れ。二、九百では時間が足りない。痔の出血、そして『クマ注意』の標識が、独りの私を本当につき落とししてくれ。 (夕刊、今年山口でもう五頭出現)

近くの一里塚、六軒茶屋(殿様の休憩所の復元)などを見る。一〇時三〇分出発。城下町長府着。一時五〇分。二時間ほど功山寺周辺を散策。功山寺で大内義長は自刃。逃げた七人の公郷の前に、高杉晋作が回天義挙、毛利家の莊厳な墓所ものぞき見でき。再訪したい。大分着、四時五五分。六四〇百、撰氏一四度の晴天続きに感謝。

道を教えてくれた人、山であった人たち、そしてまず、バカ話して楽しましてくれた三人に感謝。「こんな良い寺なのに観光客がいけない、惜しい」と言ったら「正月がくる。みな忙しい。あんたは閑なひとじゃなあ」と言ってくれたおっちゃんにも感謝。

猪群山へ

亥(い)にちなんだ山旅

(一月月例山行報告)

阿部和代

今年度の支部山行のテーマは、十二支の名がついた山です。今年亥年ですので豊後高田市の「猪群山・四五八」に「十二支会」の例会と併せて、全国の会員七〇余名とともに登りました。

「十二支会」とは、霊長類学者で日本山岳会会長でもあった今西錦司先生を中心に発足し、昭和三五五年(庚子)子ノ泊山(和歌山県)が第一回で、成人の日とその年の干支の名がつく山の、低いほうの山に登るといふ会です。

登山歴史に残る山行をされた方々がこんな低い山登りなんてと驚きましたが、山登りにはこんな楽しみ方もあるということや、人のご縁のありがたさなどを教えていただきました。

今年第四八回で、四巡目の最後の年でした。

一月一三日の真玉スブランドでの前夜祭は、まず十二支会旗の引継ぎがあり、今年還暦の人は明日この旗を持って先頭を登ります。各地からの銘酒の杯を重ねながら

ら自己紹介をしたり、山の唄や今西先生を唄び、先生にちなんだ唄を合唱したりして年1回の再会を喜び合いました。今回は西さんの司会で例年になく盛り上がりおりました。

翌日は、遠来の会員を下山の希望地まで支部会員の車で送る配車をしてそれぞれの車に分乗し、登山口へと向かいました。一〇年前にご親切に(?)作ったという階段のある道は歩幅を合わせにくく、脇の落ち葉の絨毯を踏みながら登ります。

ゆっくりと、一時間ほどかけて三角点のある頂上に着きました。



(三角点山頂にてパンザイ)

NHKと合同新聞社が取材に来ていて、遠来の会員にマイクを向けたり、取材していました。

亥年に猪群山登山というのはブームを起こし、地元で経済効果をもたらすかもしれない。夕べのホームには、昨年暮れにこの山行の新聞記事が載せられていて、すでに大きなグループが猪群山に登りこの温泉入浴に立ち寄っていました、受付をしていた私たちを、興味深そうにたずねてきた人も多かったです。

全員頂上に着くとセレモニーがあります。まず万歳をして今年還暦から卒寿になった会員へ会員からのお祝い金を贈呈します。一口五〇〇円で思いのほどをします。

私は第二七回、虎子山二〇〇(岐阜)で入会しました。その後今西先生とは三回ほど一緒に登らせていただきましたが、先生の周りには畏敬の空気が漂っておりまして、周りの方々も社会的にも登山歴もすごい方々でした。

今日は早めに今西先生流「ヤーホー」をしてストーンサークルのある峰へ、神域の入り口で地元の方から女性は身を清めるよう塩をかけるられました。夕べの宴会に先立ち支部長が詳しくこの山について説明してくれたが、石の柱は不思議です。乾杯のあと三角点に奉じたお神酒(各地の銘酒)の杯を回して親交を深めて、再会を期して握手を交わし三々五々下りてきました。

「登りは体力、下りは技術」という声を聞きながら、昔からあるという急な沢沿いの道を下りました。参加の最高齢者(八〇歳を過ぎた)

会員でも、さすが若いときから鍛えた体と身についた技術はすごいもので、リズムカルに下りていき「又あう日まで」きげん「よう」の横断幕をくぐり、これからまた次の山へと向かう会員もいました。



(ストーンサークルにて)

来年は五巡目の始まりで、発足時の子ノ泊山九〇七七(和歌山県)です。太平洋が見下ろせる絶景の山だそう。ぜひ千支巡り山行に加わりませんか。最後になりましたが、支部会員の皆さんには大変お世話さまになりました。

北アルプス

の報告

(No.2)

加藤英彦

八月一三日

四時三〇分起床。五時一〇分朝飯。五時三〇分出發。パノラマコースをとる。涸沢のカール底の雪渓を横切り、いつもならお花畑のみえるところ雪渓が多いため雪の下か。ガラ場の白丸のペンキ印に導かれて氷河の堆積丘を乗り越え、その上がまた一〇分くらいの雪渓の登りで涸沢小屋からの道と合流。左へザイテングラードへととりつく。

急な岩尾根の登りとなりぐんぐんと高度をかせぐ登りとなるが、しばしの小休止のくりかえしで、最後小屋がみえると雪渓のトラバースであっけなく二九九六mの穂高岳山荘に着く。白出の科尔だ。山荘の前広場に荷物を置き奥穂へ。いきなり切り立つ岩場でクサリそして二つの梯子の登りだ。そのすぐ右手、滑落停止のためのネットが張ってある。平成八年一月三日(日)後輩の山岳部員伊藤純君が滑落したところだ。重傷だった彼はヘリで運ばれたが今は元気で横浜で働いているとのこと。そこを過ぎると淡々とした登りでふりかえると槍が見えてくる。

最後間違いの尾根をこえ奥穂高の山頂に立つ。

三一九〇m、深見君にとってはじめての最高峰である。右に展望盤、左に祠がある。記念撮影は順番待ちの状態だ。三六〇度の展望で最高だ。しばしの間眺望を楽しみ、来た道をひきかえす。梯子のところを下からのグループと声をかけるも意思が通じない。聞くにハングル語の皆さんだ。昨年の剣にも大勢いたがまた今年もまた会ってしまった。

さて小屋からいよいよ岩場の連続となる。涸沢岳はかんたんに登り右へ涸沢側への急下降は一〇mくらいクサリのいやらしいところ。下からの人とすれ違いもいやらしい。声をかけての注意がいてるころだ。下りついたところオダマキの科尔。そしてまた登りつぎはD沢の科尔。小休止、つぎに涸沢槍の登りでまた次の梯子の下りがいやらしい。そして最低科尔へ。ここからまた登りだ。左は滝谷だ。第五尾根の上部で下滝谷をみると岩場に取り付いているパーティがみえる。第四尾根をすぎ、クサリの登りでドームの右をまくようにして、最後の北穂南峰は踏まず右へ下降して、涸沢からの南稜ルートと合流して北穂の北峰の最後の登りで山頂へでる。しばし眺望をたのしんでいると今朝方切戸で一人落ちた話もちきりだ。一〇時すぎに舞ってたへりはその救助のためだったようだ。今夜の宿、北穂小屋にチェックイ

ン。三階の一番奥、布団部屋の板の間に二人のスペースに三人押し込まれる。それでも寝るところが確保できただけでもいいかというところだ。小屋の前のテラスにてしばしの眺望を楽しみ、またとなりの人達との会話を楽しむ時間となる。事務所の写真と同じ風景が目の前にひろがる。明日の切戸こえに備えて早めの就寝。

八月一日
 さあいよいよ大切戸を越える日だ。四時起床。だんだんと周囲の山があけてくる。日の出のご来光が常念岳のやや右手雲の中から見えはじめる。みんながカメラをかまえている。刻々と明るくなつていく



と小屋を出発していつている。我々も三番目のパーティーでキレットに下り始める。急な下り一歩一歩慎重に下る。小屋より二〇〇mくらい下りたところ、昭和五〇年一月一日、山岳部の後輩南野貴史君が遭難したところだ。その年の八月現役部員等とともに追悼登山でここ現地にきて以来、久しぶりのキレットだ。一瞬の間、黙祷をささげる。そういえば大分登高会にいた古中君も冬にこのキレットで滑落死している。やはり冬のキレットはたいへんなどころだ。

いろいろな思いをかりたてながらも、ペンキの印をたよりに石を落とさないように慎重にゆっくりと下る。太いクサリの下降、短いクサリのトラバースがつづく。「鳥も通わぬ」と称された、急峻な瀧谷が左手にみえてくる。昭和三八年夏山合宿のとき踏破した第一尾根が確認できる。そのむこうは第二尾根P2フランケだ。久しぶりの懐かしい光景だ。



落もこの下りらしい。逆の登りだからそんなに気にならないところだ。鉄のわっかの釘をうちこんであるところだ。細い稜線上を登り飛騨側にまわりこみ這い松と岩の稜線を下っていく。するとこのキレットの最低鞍部をすぎず。長谷川ピークをすぎ一〇分くらいいったところ、とつぜん大きな落石の音がして、振り返るとピークのやや手前飛騨側にむかって石が落ちていくのが見える。かなり落ちていった後にこんどは砂煙があがっている。ちょうど通り合せていなくてよかったなと一安心だ。

逆からの時きつい登りで、飛騨泣きとよばれている傾斜を下る。足場が滝谷側にきれ落ちている岩場のトラバースも慎重にスリッパを注意しての下降となる。A沢の谷に小休止。ここらあたりから南岳小屋を朝発つた組とすれ違うように出くわすパーティーがでてくる。

さてここからは今度はきつい登りが待っている。南岳方面から下りてくるパーティーを気にしながらの二つの大きな梯子の登りである。このあたりから今朝でがけに用をたさなかつたつけがまわってくる。三つしかないトイレに出発を急いだため並ぶのをあきらめてきたからだ。なんとか我慢しながら南岳の小屋までと思いつつも、なかなかきつい登りであった。すべりこみセーフで小屋のまえのトイレへ。ここでも並んで待たされる。さて南岳でもまた一人思い出す。平成二年三月、卒業目前に単独で南岳西尾根を経由して槍ヶ岳に向かった阿野潤君が吹雪のためかえらぬひととなったところだ。これからは南岳はひと登り。なだらかなくんだりで天狗原への分れ。天上のプロムナードのような散歩道。中岳手前の水場で一息いれる。水

ものとなる大きな雪渓がのこっている。ここから左へ二〇〇一年に新しく開いた登り道できつい中岳への登り。中岳の二つの梯子をくだりつぎは大喰岳の三つのピークへ。やがて下り飛騨乗越へ。ここから槍ヶ岳山荘への最後の登りでテントサイトに着けば小屋はすぐそこだ。

その後深見君から一七日午後五時富山に下山したと連絡あり。(二〇〇六年八月一〇〜一五日)

西 孝子

いつまでもお元気で

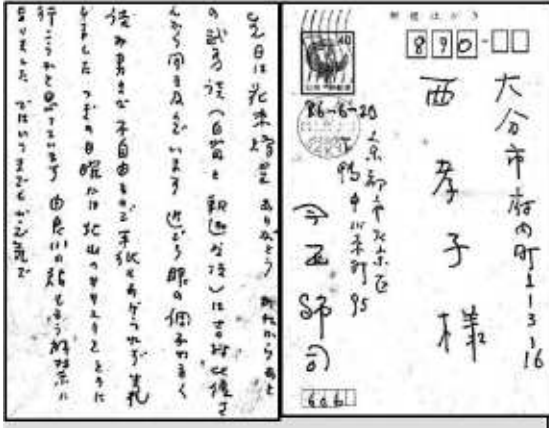
西 孝子

ルです」に無言で歩き、下山した時... 文化勲章をいただいた先生に、

「ではいつまでもお元気で」の葉書を頂いた時には、気にもとめず...

鵬程万里の波を 花訪ねこまゆかん

三高歌集「あま楼台」より 一九八六・五・九 錦司謹書



大分市 西 孝子 謹書

今秋の登山

安部可人

- 一〇月三日(火)(晴れ)独り... ○一〇月三〇日(月)(晴れ)同行者... ○十一月五日(水)(晴れ)独り... ○十一月九日(日)(雨)...

「大分山の会」

『平成16年1月16日にアコンカグア峰に最年長登頂』、そして『冬のくじゅう連山で美しい日本晴れ』という投稿を編集子は覚えていました。星子さんの投稿でした。他の山の会の多くの方たちも“外国の高峰に遠征、登頂に成功という内容”の記事もこれまでに何回となく掲載され読んでいましたが、お名前がウチの〇〇ちゃんと同じという理由で特に印象が深かったのでしょうか、2番目に登場して頂きました。(編集子の個人情報を開示してしまいました。<m()m)

名 称 「大分山の会」
創 立 1982年12月 星子 以下発起人4名
会 務 所 大分市三ヶ田町8組 岩田靖子 方
現 会 長 星子貞夫
現在会員数 26名

創立の趣旨

登山は一部の人達だけのものではない。体を鍛え知識、技能を身につければ誰でも楽しめるスポーツである。
登山を通して社会に貢献する。

理 念

登山のフィールドは地球である。その喜びは自然の与える困難に打ち克って頂上に立つことである。

必要な資質

体力、精神力、判断力、生活技術、登攀技術

会員の義務

① 会費の納入 ② 山行報告を必ず行うこと。

あ ゆ み

四季を通じてオールラウンドな山行をする。

① 国内 : 冬季 (1月) 富士山、(2月) 大山、(4月) 北鎌尾根槍、(5月) 立山

: その他のシーズン : 全国の山々

: 年1回のワンデイ・くじゅう連山一筆書き縦走登山 (ヘヤピンー星生山ー久住一天狗一中岳ー稲星ー白
ロー立中山ー大船山ー平治岳ー三俣山ーすがもり峠ーヘヤピン)

② 海外 夏季のみ

《登頂した山》 モンブラン(10名)、マッターホルン(3名)、ブライツホルン(6名)、モンテローザ(3名)、リンピッシホルン(1名)、アイガー(1名)、メンヒ(3名)、ツールド・モンブラン(4名)、アコンカグア(3名)、チンボラソ(2名)、コトパクス(1名)、イリニザ(2名)、マッキンレイ(1名)、キリマンジャロ(3名)、エルブルース(3名)

《未登頂の山》 シンヤパンマ(7800mまで)、チョ・オユ(7200mまで)、ワスカラン(ガルガンダまで)

《今後の登山予定》 チョモランマ北稜コース(8848m) 2007年ブレに登山予定。

③ 奉仕… 年1回のくじゅう山清掃登山

初歩的な岩登り技術とザイルワークの練習。

会 報

毎月1回発行 (メール希望者にはメールで送信)

楽々登山のすすめ五か条

1 荷物は軽くする。(不必要な余分な物は持たない。)

2 ゆっくり複式呼吸で歩く。(平常呼吸は40%、複式呼吸は60%の酸素とり入れ効果あり。)

1 水分補給を心がける。(体重)X(一日の行動時間)÷200 (%)

例] 体重50kg X 10時間の行動時間÷200 = 2,5%。医学的には水だけでなく、電解質の物とか塩分とか必要ですが、単純に考えて水分がいかにか必要かを表しています。

4 頻繁に食べる。(2時間毎に糖分、炭水化物を補給する。)

5 トグルで歩く。(出した足に体重を移動して立ち上がる感覚)

新入会員に望むこと

会が何かをしてくれる事を期待するのではなく、自分が会の為になんか出来るかを考えて行動する事。

(何処かに連れて行ってという姿勢ではなく、どこ何処に行きましょうと言う姿勢こそが重要。)

マ ー ク

黄色のリングはザイル、山はエベレスト、ことば CIMA ETERNA は『山よ 永遠なれ』

実は星子さんが、「全国的に見ても大分県には素晴らしい会がいっぱい有るんやけど、うちでいいんな？ 順番のルールは？」と聞いてきました。ルールなど思ってもなかった編集子は、「このコーナーに名乗りがない時は編集委員会の独断と偏見により決めさせていただきます。編集委員会全員の決定です。」とご納得いただき登場していただいた経緯がありました。今後このコーナーを続けていくために順番のルールがあった方がいい？ 迷っているところです。

現実に素晴らしい会がいっぱい有りますのでいつかお願いに上がられるか、3ヶ月に1回の選考ですので、掲載に名乗りを上げてくださいますようお願いしています。_()_(長野)

飯田勝之

囲峠から

「天神原山へ」

(その1)

囲峠は大越峠とともに宇目町の木浦と藤河内を結ぶ古くからの峠である。平家の落人伝説の残る藤河内は、今日ではアスファルト舗装道路が三方から通じているが、かつては桑原川の峡谷の奥に、ひっそりとたたずむ秘境の集落で、昔はこの二つの峠道が外界とをつなぐ唯一の交通手段であったのだ。この峠には現在、藤河内側から開設されている林道が、峠の少し先まで伸び、木浦側からのびた林道と、あと二、三年でドッキングされる予定と聞く。この峠を挟む稜線が新百姓山と天神原山とを結ぶ釣尾根となっている。この稜線歩きを紹介してみよう。

木浦から大明神越に通じる車道を上ると、集落の終わった奥の、最初のヘアピンカーブのところ、左に入る細い舗装の道が分かれている。途中までコンクリート舗装されたこの車道は2万五千分に1地形図にはない。(地図にある実線の車道は今は荒れ果てて通れない)急な車道をどんだん登っていくと、約三〇分、二キロほどで右から来た古い林道と合流し、さらに左(東)へのびている。その少し先は、二万五千の地図にエメリーと記載されたところである。この三叉路の谷に沿って登っていくのが峠への近道だ。雨のあと以外はほとんど涸れ沢の、大きな石がごろごろした急な谷を直登することになる。私はこれを登りながら、ふと根子岳のヤカタガウドの谷を思い出した。途中で右から迂回してきている古い荒れた林道を横切り、さらに谷と格闘すること約一時間で、林道の擁壁の下に達する。登りやすいところを選んで、這い登ると、まだ連結していない囲峠の林道である。林道を少し左(東)に行くと高いコンクリート擁壁につけられた階段があり、これを登ってスギの植林地を直登していけば数分で鞍部の古い峠に達することができる。峠は薄暗い植林地の中で、わずかにそれとわかる峠状の鞍部であるが、ほとんど往事の面影を残すものはない。

天神原山へは、先の林道をそのまま東に約10分ほど緩く登ると、掘り割りの新しい峠があり、その向こうには藤河内の谷が落ち込んでいる。掘り割りの北側ののり面にコンクリートで作られた小さな階段があり、これが小さな稜線へのとりつきである。すぐに稜線に出て、右(南)は低木の二次林(北)はまだ若いスギの植林地である。この境に沿って稜線を北東に向かって登っていく。植林地側は歩きにくい、自然林の側のが歩きやすく、植生境に沿ってかすかな踏み跡もあるので、それを拾って登るとよい。少しづつ高度が上がると、時々振り返る後方には新百姓山への稜線が続いているのが見え、その両側に北は傾山に至る稜線、南に夏木山から桑原山に至る稜線、後方に大崩山などが見えてくる。二〇分ほど登ると北の植林地はスギの成木となり、逆にこのあたりから天然林内はブッシュがひどくなるので植林地側の方が歩きやすくなる。暗く展望のきかないスギ林の中を登っていくと傾斜も少し急になり、やがて岩のおい稜線上の小ピークに達する。



ここからほぼ直角に南東向きを変え、大きな石灰岩が露出し、クヌギの多い稜線を緩やかに登っていく。右(南)はヒノキ、左(北)は天然林で明るい稜線を、一〇分ほどで小さなピークを通り、小さく下って再び緩く登りついたところが三等三角点のある天神原山頂である。頂上の南側はヒノキの植林地、北は天然林で以前はうっそうとした木立の中であつたが、最近、展望を開くためなのか、北側の樹木が伐採されてのわずかに遠景を望むことができる。山頂から東に向かって踏みあとが続く、目印のテープがあるが、それは「大分百山」で紹介されている女郎の墓、大越峠の方からの原生林が残るこの一帯を、『熊が棲息するところ』というロマンを登路である。二〇年ほど昔、私はこの大越峠からの道を登り、同じ道を下山中に聞き慣れない獣の声を聴いたことがある。そして、



「ん？」と何気なく足を止めると疎林の向こう(目測五〇mほど?)に動く黒い動物の姿を見た。「熊」と思ったとたんに、私はもちろんそれ以上進めなかつた。背中に緊張の糸が走り、膝はガクガク震えて突然の恐怖で腰が抜けそうになつていたので、黒い影は疎林の斜面を急いで遠ざかつていったが、下の方でガラガラと石の落ちる音がして、その動物があわてて逃げていくことがうかがえた。はつきり「熊」と目視できたわけではないが、聞き慣れない唸り声、うごめいていくことなどを考えると、猪や鹿とは考えられず、以来私は、今でも祖母・傾・大崩山系には熊が棲息していると信じている。しかし、その事実を確認するような詮索などには、あえて異を唱えたいのである。学術上は九州では絶滅したと言われている熊が、いまでもひっそりと人知れずに・・・九州で唯一、ある程度まとまった原生林が残るこの一帯を、『熊が棲息するところ』というロマンを秘めたままで守っていきたいのである。

お知らせ



二月月例山行の案内

・月 日…二月十一(日)
・目的地…大仁田山
(望洋台(315.6m))
(宮崎県・五ヶ瀬町)
未(ひっじ)の山旅

・出 発…午前五時サニー出発
・竹田市玉来…六時二〇分集合
・近くの山(二上山、諸塚山を
予定)に登ります。

三月月例山行の案内

・月 日…三月一八日(日)
・目的地…元猿山(270.0m)
(佐伯市・蒲江町)
申(さる)の山旅

・出 発…三月一八日午前六時
サニー出発
・佐伯市池船町…七時三〇分集合

四月月例山行の案内

・月 日…四月二二日(日)
・目的地…犬鳴山(683.7m)
(福岡県・若宮市)
戌(いぬ)の山旅

・出 発…四月二二日午前五時サ
ニー出発

事務局よりお知らせ

一・定例総会

・月 日…四月一四日(土)
・時 刻…午後六時より
・場 所…コンパルホール
「視聴覚室」

二・役員会

・月 日…三月一四日(水)
・時 刻…午後六時より
・場 所…コンパルホール

三・平山会長との懇親会

今年も日本山岳会会長・平山善吉氏との懇親会を行います。参加希望者はあらかじめ日程を空けておいて下さい。なお、詳しい日程については、後日お知らせします。
・月 日…三月三日(土)
・場 所…

・時間があれば近くの山に登ります。

・会 費…四、〇〇〇程度
・参加申し込み…二月末までに事務局まで

四・本部総会

・三月一〇日(土)

五・中央分水嶺踏査証

分水嶺踏査参加者には、本部作成の参加証が事務局に届いていません。参加者全員に個人名入りで作成されています。受け取りに来て下さい。

六・支部事務局について

事務局の場所(サニー・スポーツ)は現在の場所のままです。続くととなりません。

七・会費、支部費の納入について

未納の方は至急納入して下さい。

八・加入申込書について

会員名簿等の整理のために、東九州支部特製の用紙を昨年各支部員にお渡ししましたが、まだ提出されていない方は、事務局へお送り下さい。

九・九州五支部集会

・月 日…二月三日(土)
午後二時より
・場 所…北九州市
山行…二月四日(日)平尾台
貫山

十二支会よりのお礼

猪群山では大変お世話になりました。お礼のはがきが事務局に届いています。

後記

○ ニセコに行ってきました。毎年イナスゴ度のニセコがマイナス〇度で雪は積もらず、雨が降りました。パウダースノーどころか、スキー場のあちらこちらに土が出てました。

○ とても北海道とは信じがたく、広島あたりのシャベツト状の雪でした！地球温暖化を切実に感じました！

(あずさ)

○ 年末に日田市上津江町(旧上津江村)へ引越しました。気温が大分市内より五度ほど低く、特に朝が寒く感じます。

○ テレビが集合アンテナで映りが良くありません。さらに何故かNHK総合だけが映りません。受信料対策かな？

(佐藤(秀))

○ 平成一八年一二月一八日(晴れ)高尾山行きの電車が北野駅を発つたとたん、建物の間からポツと絵葉書のような美しい山が目に飛び込んできた。エッ今のは富士山？なんて感激、思い

がけずにここから見られたとは二でも頂上では富士山がなかった。午後はダメならしい。

○ 平成一八年一二月二二日依頼していたHさんから山のクラブ紹介のメールが送られてきた。来年の登山予定にチョモランマがあった。ウアアすごい。ご成功を祈念いたします。(早起きがてなコケッコ子)

○ 三日、甘木の鳥屋山登山。夕方から初めて教えた生徒たちの還暦祝いへ招待され、出席。日田泊り。(禁酒中)

○ 恒例の正月登山へ出発。折元山と八面山へ。五日、七〇歳になった。もっと忙しく生きよう。(安部)

○ ずいぶん久しぶりに猪群山に登りました。一二支会の遠来のお客様をお迎えしての賑やかでゆったりと楽しい山遊びの時間であったと思います。

○ 久しぶりに登った猪群山には立派な登山道が整備され、全く違った雰囲気を感じさせられました。昔の谷道よりも明るく、快適な稜線道で良いと思いましたが、延々と続く階段は、多くの登山者を迎えて、道の崩壊防止のためにはやむを得ないことはいえ、やはり無粋に思われます。

○ ストーン・サークルの不思議なたたずまいには、いつもミステリアスな気持ちに誘われますが、地元の人から「石の手前で、女性

だけには塩をまいて」と手渡されたと聴き、『女を不浄のもの』とする女性への差別観と、古い因習に未だこだわっている大分の恥部を見せたように感じたのは私だけでしようか？

(K・I)

二二は何処？

- ・ この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？
 - ・ 事務局までがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。(二名まで、正解多数の場合は抽選します。)
 - ・ 締め切り二月二十八日
- 前回の正解は西穂高独標付近から見た奥穂高でしたが、ちよつと難しすぎてか、正解者はありませんでした。

日本山岳会東九州支部報 第36号

2007年(平成19年)1月25日(木)

発行者 梅 木 秀 徳

編集者 飯 田 勝 之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-16

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 佐藤正八

